

平成 2 9 年度

中学生の長崎市平和祈念式典への派遣事業感想文集

藤 枝 市

平成29年 長崎市平和祈念式典派遣中学生

No.	学校名	氏名
1	藤枝中学校	石川 嵩葵(いしかわ たかき)
2	西益津中学校	藤崎 隼士(ふじさき はやと)
3	青島中学校	久保田 菜緒(くぼた なお)
4	葉梨中学校	鈴木 麗菜(すずき れいな)
5	高洲中学校	小林 陸(こばやし りく)
6	大洲中学校	栞高 里帆(くわたか りほ)
7	瀬戸谷中学校	向島 稜那(むこうじま りょうな)
8	広幡中学校	森 日和(もり ひより)
9	青島北中学校	布川 瑠惟(ふかわ るい)
10	岡部中学校	小柳津 拓馬(おやいづ たくま)

僕たちは、八月八日と九日に最後の被爆地長崎へ行き、原爆について学びました。七十二年前の八月九日。もう一つの太陽を見たという記録があるほどの強い光を放ちながら落とされた原爆は、鉄骨の建物を吹きとばす爆風と数千度以上の炎で、長崎の街と多くの命を消し去ってしまいました。また、無事生き残った人の中にも放射線による後遺症で、今でも苦しんでいる人がいます。たった一発の核兵器でもこれだけの被害が出るのに、現在世界には、約一万発の核兵器があります。もし地球で核戦争が起きたら、今の暮らしはもう取り戻せなくなるかもしれません。僕は今まで、長崎に原爆が落とされたということしか知りませんでした。しかし、原爆の雲の下で起きた事実を見たことで、原爆の恐ろしさ、そして広島や長崎の方々が核兵器廃絶を訴え続けていることの重要さを感じました。この二日間の貴重な体験を無駄にしないようにしていきたいと思います。

皆さんは今、たった一発の原子爆弾が一瞬にして街を破滅させ、七万五千人もの命を奪った光景を思い浮かべることができますか？
僕は今回、長崎平和祈念式典に参加させていただき、原爆がいかに残酷で非人道的であるか、そして、被爆した方々、遺族の方々の深い苦しみを知りました。
平和祈念式典のなかの「平和への誓い」では被爆者代表の深堀さんが、ご自身のつらい体験をお話し下さいました。
原爆が投下された時、十六歳だった深堀さんは、倒壊した家屋の中で、十八歳のお姉さんが亡くなっているのを見つけました。そしてお母さんと弟さんとで材木を井桁に組み、お姉さんの遺体を茶毘に付したのだそうです。
僕にも妹がいます。もし自分だったらと考えると、胸がはりさけるような気持ちになりました。

また、長崎市の田上市長は「平和宣言」の中で次のようなことをおっしゃっていました。

「人はあまりにも辛く苦しい体験をしたときその記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければならないからです。それでも、被爆者が、心と体の痛みに耐えながら体験を語ってくれるのは、人類の一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようと決意しているからです。世界中のすべての人に呼びかけます。最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです。戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。」

僕は、長崎で、被爆者の方々からの平和のバトンを受け取りました。長崎で、見て、聴いて、感じたことを決して忘れません。そして、当たり前のように過ごしてきたこの日常に感謝し、これからも平和に対し関心を持ち続けていきたいと思えます。

青島中学校 久保田 菜緒

七万三千八百八十四人。この数字は、長崎に投下された原爆による当時の死者数です。

私は今回の派遣事業で長崎へ行き、この数字がとてども頭に残りました。たった一発の核兵器で、こんなにも大勢の命が奪われてしまったのです。生き残った人も大半が家族も失った悲しみや後遺症に苦しみ続けました。もし私が身近な人を亡くしてしまったら、言葉では表し切れないほどの心の傷を負うでしょう。核兵器のもたらす被害の悲惨さを再認識し、私は怖くなりました。最近、ミサイルが北朝鮮から発射されたというニュースをよく見ます。先日は日本の排他的経済水域内にそれが落ちたと聞き、本当に他人事ではないと思えました。

今、私達の世代は「原爆」という言葉は知っていても、肝心のその恐ろしさを知りません。それどころか知ろうともせず、軽く捉えてしまいう人もいます。しかし、それではいけないのです。大切なのは、私達一人一人が原爆の実態を知り、平和な世界をつくるために確固たる意

志を持つことです。たとえ戦争を知らなくても、被爆国の若者である私達がそのような意志を持つことが平和への一番の近道だと、私はこの長崎訪問を通して強く感じました。

葉梨中学校 鈴木 麗菜

原爆投下から七十二年が過ぎ、被爆者の平均年齢が八十一歳を超えたということを知りました。被爆者は今でも七十二年前の出来事を明確に覚え、苦しみながら私達に語ってくださいました。もし、それがなければ大勢の人が無関心となり、また同じことをくり返していたかもしれない。だから私は、被爆者の想いを受け継ぎ、被爆者と共に平和のバトンを未来へ繋いでいきます。この二日間、原爆資料館では、核の恐ろしさ、悲惨さを自分の肌ではっきりと感じることができました。平和祈念式典では、たくさんの言葉を直接聴くことで私達は今、どれほど幸せなのかということを考えさせられました。学校では学べないたくさんのことを学ぶことができました。

今、私達ができること、それは一日を大切に生きること、そして被爆者の想いを決して忘れず伝えていくことだと思います。核兵器禁止条約が採択されたように平和を願い続けていれば、いつかきっと被爆者の想いが世界に伝わることを信じています。

高洲中学校 小林 陸

「長崎を最後の被爆地に。」

この言葉は、長崎市の平和祈念式典で、いろいろな方が口にしていた言葉です。過去はもう変えられない。だから、今後このような惨禍を体験することが無いように、全世界に向かって呼びかけている言葉です。

しかし、世界には約一万五千個もの核兵器があります。原爆投下から七十二年。市や県、国でいろいろな政策を立てているにも関わらずこ

の結果です。つまり、これからの未来は、核の恐怖や非核平和を全世界に伝えることが大切になると思います。そして、それは被爆者だけでなく、未来の社会を創る僕達の世代も協力すべきだと思います。広島や長崎、本日のような地域の平和祈念式典は、これからも唯一の被爆国として世界恒久平和を呼びかけるためだと思います。世界の情勢は、現在乱れつつあります。僕達の世代が被爆者の意思を引き継ぎ、この空を駆ける千羽鶴になる。それが平和への架け橋になると信じて。

大洲中学校 栗高 里帆

私が今回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加して強く感じたことは、この日本の地に原子爆弾が投下されたという事実があること、そしてその事実を私たちの世代が未来へ伝えていかなければならないということです。核兵器の怖さ恐ろしさを改めて知り、もうこんなつらいことは二度と起こしてはならない、起こしてはいけないと強く思いました。被爆者が語る言葉は私たち戦争を知らない世代にとって、とても心に刺さるものです。しかしその被爆者の言葉ばかりに頼っていくのではなく、自分たちの手でこれからは平和への思いをつないでいかなければならないと思います。核兵器は絶対にいけない、その思いを誰もが持つことができる世の中になってほしいと思っています。私は今回の経験を忘れずに一日一日に感謝しながら日々生活し、戦争や核兵器のことを自分の言葉で広げていき、少しでも平和な未来へ近づくことができたらと思います。自分にもできることを探しこれからの未来へつないでいきたいです。

瀬戸谷中学校 向島 稜那

私は、戦争について何も知りませんでした。長崎に原子爆弾が落とされ、多くの人たちが犠牲になったことしか。戦争は、いろいろな物を

奪い、悲しみを増やします。そこで私は、戦争についてもっとくわしく知るために、平和祈念式典に参加し、平和資料館を訪れて自分の知らない戦争について知りたと思いました。

今から七十二年前の八月九日、午前十一時二分、長崎市に原子爆弾が落とされました。この原子爆弾が落とされ、今までに十七万五千七百四十三人が亡くなりました。平和祈念式典で聞いた平和への誓い。被爆者代表の方は、原爆が落とされて、お姉さんを亡くしたそうです。無理にでも家に帰っていたら最後に声をかけられた、と後悔していました。大事な人を亡くした時の思いは、一生忘れられないことなんだと改めて知ることができました。現在近くの国でミサイルが発射されています。悲しい過去が繰り返されないか心配です。今はとても平和になりました。今の生活を取りもどしてきた人たちは、どんなに大変だったろうか…。二度と戦争を繰り返さないように、自分ができることは何かを見つけていきたいと思いました。

広幡中学校 森 日和

私は長崎へ訪問する前に原爆について自分なりに勉強をしてから行きました。しかし、実際に被爆地に足をふみ入れると想像していた以上に原爆の爪跡は恐ろしく、その恐ろしさに驚いたと共に実際に自分の体で触れる大切さを感じました。

長崎原爆資料館にはたくさんの写真やその当時の服、帽子等の展示がありました。男女の性別も、大人なのか子どもなのかも分からない黒焦げになった遺体の写真、熱で焼けただれた服。そんな生々しい写真や実物を目の当たりにして心が締め付けられました。

「核は人類と共存できない。」平和祈念式典の平和への誓いで被爆者代表深堀さんはそう語っていました。二〇一一年三月、福島第一原子力発電所の事故で感じたように、核の脅威は自分達が思っている以上に身近にあります。ヒロシマ、ナガサキに投下された原子爆弾の恐ろしさも、他人事ではなく自分に置き換えて考えることにより、今では普通の生活に幸せを感じたり、他人を思いやることができると思います。

そのために被爆者の方々から平和のバトンを受け継いだ私達が、原爆を知らない世代に伝えていき、小さな所から平和な未来を広げていきたいです。

青島北中学校 布川 瑠惟

「原子爆弾は絶対にだめだ。」

ぼくは、長崎原爆資料館で原子爆弾によって起きた被害を見て、そう強く思いました。当時の長崎市の人口の半分以上が被害を受けました。しかも、建物は一気にがれきになり、残った物でも曲がっていたり、変色していたりなど、被害の大きさは予想をはるかに上回りました。この爆弾の恐ろしさは、放射線によって引き起こされた被害もあります。

それによって今もなお苦しんでいる人もいます。

ぼくは人の命はどんなものよりも大切なものだと思います。しかしその命を、こんなにも簡単にたくさん奪えてしまう兵器があるという事実があります。さらに、生き延びた人でも後遺症に苦しんでいる人がいます。これらの事実を後の世代に伝えていきたいです。そしてこのような悲しいことが無くなり、平和な世界が続いていくといいです。

岡部中学校 小柳津 拓馬

僕は長崎平和祈念式典に参加して、原爆が落とされた時と、今の長崎を知りました。当時の八月九日は晴天だったそうです。しかしファットマンという一つの原子爆弾によって全てが変わってしまいました。多くの死傷者を出し、長崎一面を焼き野原にしてしまったのです。何も罪のない人が無惨に皮膚がただれ、内臓まで焼かれ、放射線による病気も多く発症しました。その光景はまさに地獄だったでしょう。そして未だに、病気に苦しんでいる人々がいます。このようなことがあったにもかかわらず、依然世界から核兵器はなくなりません。さらに

は、核兵器を使用した戦争が起こるのではないかとささやかれています。

しかし、このような時代だからこそ唯一の被爆国である日本が、様々な国と連携して核保有国に警鐘を鳴らし、核兵器のない平和な世界に先陣を切って進めてほしいです。また、戦争を知らない私たち世代がもっと、戦争がもたらす悲劇を知るべきだと思いました。

平成29年度中学生の長崎市平和祈念式典への派遣事業感想文集

8月15日 追悼式典で朗読

発行：平成29年9月

静岡県藤枝市岡出山一丁目11-1

藤枝市総務部総務課

(藤枝市郷土博物館では、「戦時中の暮らし」コーナーを設けており、藤枝空襲の際の資料を常時展示しております。)